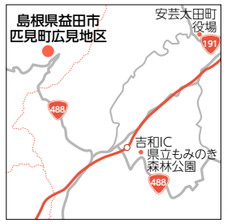
ふるさとはいつも心の中にある―

島根県益田市匹見町広見地区に見る歴史

たとえ無人の集落となっても、
心はいつもふるさとに帰る―。
吉和地域に隣接する広見地区では、
昭和27年には48戸196人が住んでいた。
しかし、燃料革命、高度成長に伴う人口減少は、
昭和38年の豪雪が追い打ちをかけた。
昭和45年には最後まで残った7戸が移転し、
広見は無人の集落となった。
広見出身の保木本さんにお話を伺った―。

「幾人も産声あげし　広見の地　も一度住みたい　皆んなと共に。」
島根県益田市匹見町広見地区の屋敷跡に建てられた石碑の句。



国道488号は匹見町の区間で落石のため現在通行止めとなっている。

島根県匹見町広見地区

吉和支所から国道488号を進むこと約21㎞。益田市匹見町広見地区は県境に近い標高650mの山の中にある。

区域の多く占める森林を資源に、木炭生産、木材の伐採・搬出・製材、それに水田とわさび栽培が主要な産業だった。特に匹見わさびは「青いダイヤ」と呼ばれ、関西を中心に人気が高く、高値で取引され、貴重な現金収入として取り組んでいた。

昭和28年には地区の水力自家発電設備が完成。ピーク時には約200人が住み、力を合わせて生活を営んでいた。

「山の奥にあり、寂しいところではありましたが、人のつながりが深い地域でした」。そう話すのは、保木本眸さん。昭和40年に家族5人で広見を出て、現在は四季が丘で暮らしている。

匹見町の中心からは約12㎞の距離にあった広見地区。昭和20年代後半から始まった燃料革命、木材の輸入自由化により生活はじわじわと追い詰められた。そして、昭和30年頃からは高度経済成長に伴い、若い労働力は一斉に街へ流れた。

白い悪魔が襲う

人口減少に追い打ちをかけたのが、「サンパチ豪雪」と呼ばれた昭和38年の記録的な大雪だ。昭和37年暮れから38年の1月下旬にかけて発生した大陸からの強い寒気団が北陸から中国地方を襲った。

ひと月以上も降り続いた雪は、広見地区では4mにも及び、町道（当時）が封鎖され、完全な孤立状態となった。自衛隊によるヘリコプターからの生活物資が投入され、動ける若者は10数㎞の雪道を街まで歩いて物資を調達した。

当時、広見地区で民生委員と町内会長、そして発電所の管理を任されていた保木本さんは、こう振り返る。

「集落の電気は水力自家発電で賄っていたので、この緊急事態に停電を起こしたら大変なことになると必死で電気を送り続けました」。

42日間も降り続いた雪。その合間に通学路の除雪、屋根の雪下ろし、救援物資の分配・配送を行った。「雪下ろしというより、雪上げと言ったほうが早いですね。屋根より周りの雪の方が高いのですから」。

降雪が止まると、今度は匹見町内各地で雪崩が頻発。深夜に別の地区で広見地区出身者を含む7人が生き埋めになり、5人が死亡する事故が起きた。

「広見にはその親族が住んでいました。そのニュースを聞いた広見の集落の人たちで8㎞離れた現場まで、雪を踏み固めながら4時間以上も掛けてその親族を送り届けました」。

加速度を増した人口流出そして無人の集落に―

記録的な降雪は、7月になっても地域のあちこちにその姿を残していた。

この豪雪を機に、1戸また1戸と離村が続いた。また、昭和39・40年にも集中豪雨の自然災害が広見を襲い、人口流出は加速度を増した。

昭和40年に広見地区から移転した
保木本　眸（ほきもと・ひとみ）さん
（79歳・四季が丘）

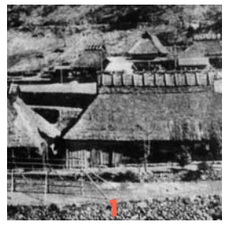


写真__1　昭和30年頃の広見地区の様子。奥の左側が保木本さん宅。　**写真__2・3**　昭和38年1月の豪雪時、道も分からない深い雪の中、物資の運搬をする広見連絡隊。　**写真__4**　昭和38年2月屋根まで雪で埋まった広見小学校校舎。　**写真__5**　当時の生活は、地域の結束を固めた。橋なども皆で協力して作っていたという。広見出身者で集まる「広見会」は昭和63年から始まり、現在も続いているという。写真は、昭和63年に行われた第1回「広見会」。95人が参加した。
写真提供　保木本眸さん・島根県益田市

7人の命救った広見小学校

平成20年2月、恐羅漢（おそらかん）スキー場で起きた7人の遭難事故。廃校だった広見小学校がその命を救った。

山の反対側に降りた7人は、昭和45年に廃校になった広見小学校にたどり着き、その中で暖を取って2晩を過ごした。

「遭難のニュースが流れた時、広見の方に降りたのではないかと思っていました。廃校となった母校の活躍に私も含めて卒業生は胸が熱くなりました」。

今でも夢に―

「たとえ無人になっても、ふるさとは忘れることのできない場所。今でも夢に見ることがあります」と、保木本さんは目を細める。

広見には、いくつもの住居跡に石碑が立てられている。「住んでいた人が、百年以上続いた家と土地から離れるにあたって、そこに生きた証を残そうとしたんです」。

保木本さんの日課の一つに、新聞のスクラップがある。広見や島根県の話題があれば、切りぬいて保存している。

「あの石碑に書かれている句は、広見のみんながそう思っていること。ふるさとは、いつも心の中にあります」と笑顔で話してくれた。

参考文献▼匹見町誌　現代編　編集　匹見町誌編纂委員会
▼ふるさと拾遺集　廣見　斉藤壽男著